



Title	近世・近代中国社会における移住・開発と四川糖業
Author(s)	岡田, 悠希
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101582
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(岡田悠希)	
論文題名	近世・近代中国社会における移住・開発と四川糖業
論文内容の要旨	
<p>本論文は、主に18世紀から20世紀にかけて、四川省で行われた移住・開発と、砂糖の関係に着目し、近世・近代中国社会の在り方を解き明かそうとするものである。</p> <p>1980年代から日本の明清史学界で盛行した「地域社会論」研究は、流動性の高い「地域社会」を秩序づけていた地域エリート（科挙身分保有者）に対する興味から出発した。多くの研究が、地縁や血縁などに基づく社会関係を利用しながら、地域エリートへの上昇を果たそうとする人々の姿を見出してきた。</p> <p>しばしば指摘されたように、上昇の過程で、人々は様々な経済活動を通して、富の蓄積を行っていた。しかし、従来の研究では、上昇を可能にした生業について、その産業史的な背景が深堀りされることはほとんどなかった。地域エリートは、中国市場経済の動きにうまく対応した結果、上昇を果たしていた可能性がある。人々が上昇を果たす過程を、中国社会・国際社会における動態と関連させながら、明らかにする必要がある。そこで本論文では、清代の四川省で糖業に携わった結果、社会的な上昇を果たした移住者一族に着目し、その背景にあった砂糖の生産・流通・消費の状況を明らかにした。</p> <p>清代の四川省において砂糖生産は、広東や福建からの移住者とその子孫によって担われていた。そのため、本論文はまず、18世紀初頭に広東から四川への人口移動が発生した背景を明らかにした。当初、広東の総督・巡撫は災害や人口圧力によって土地を失った貧民が、耕地を求めて四川へと流れ出ていると考えていた。そのため、四川へと移動しようとしていた人々を、広東省内の荒地に移送していた。しかし、大勢の人々が広東省内での開墾を拒否し、四川への移住を懇願する事態となった。人口過剩によって開発が限界に達していた広東省内において、開墾可能な土地は山間部内のわずかな平地に限られていた。そのため、人々は四川への移住を選択したのである。</p> <p>移住者の実態は、広東省内に土地を有した中間層であり、土地を失って流浪する貧民ではなかった。彼らは、現住地よりも稲作に適した土地を求めて移住を行っていた。そうすることで、将来的に一族のなかから科挙合格者を輩出し、社会的な上昇を果たすことを目指していた。</p> <p>人々は、できるだけリスクを最小化しながら計画的に移住を行った。移住に際しては、家族に先立ち、数人の男性が先に四川を訪れ、生活基盤を整えておくことが多かった。また、人々は、すでに四川で土地を有している親類縁者を頼りにして移住した。こうした移住が鎖鎖した結果、広東から四川への人口移動は大規模なものになった。</p> <p>四川において移住・開発は稲作可能地帯から進展し、当地では土地獲得競争も熾烈化した。一方で、稲作に不向きな土地は余地として残されていた可能性が高い。河川の流石作用によって川沿いに形成された平原である「河壩」はそのうちの一部である。</p> <p>四川省において砂糖の原料となる甘蔗（サトウキビ）の栽培は、この「河壩」で行われていた。「河壩」は砂質土で構成されており、水はけがよいため甘蔗やタバコ、野菜の栽培に向いていた。だが、水害が発生すれば真っ先に被害を受ける位置にあった。四川省において「河壩」における甘蔗栽培・砂糖生産は、移住時期や資金面での問題で、稲作可能地帯に入らなかった者たちによって行われていた。</p> <p>広東・福建からの移住者によって始まった四川における砂糖生産は、その後数世代かけて徐々に規模を拡大させた。19世紀後半には、四川省における砂糖生産量は一年に約18万トンにも及ぶようになり、四川は中国における一大産糖地の一つとして名を馳せるようになった。その結果、砂糖生産・流通によって得られた利益で稲作可能地帯へと進出し、科挙合格者を輩出して社会的な上昇を果たした移住者一族が現れるようになった。</p> <p>移住者一族が糖業を通して上昇を果たすことが出来たのは、中国社会における砂糖需要を受け、四川糖業が好況を迎えていたからである。19世紀後半、四川産砂糖は、湖北・湖南をメイン市場としながら、江西・江蘇・安徽・河南・陝西・甘肅・雲南にも流通していた。当時の中国社会には確実に砂糖消費の文化が存在していた。白糖や冰糖（氷砂糖）は、高級品であったが、料理や菓子に頻繁に使用されていた。四川産白糖・冰糖は中国各地の料理に用い</p>	

られ、当然四川料理にも用いられていた。ただし、庶民が日頃から摂取していたと考えられるのは、白糖や冰糖よりも価格の低い紅糖である。紅糖は菓子や料理にも使われていたと思われるが、最も一般的な消費方法は、湯や粥に溶かして飲むというものであった。

紅糖は、単に味付けとして用いられることも多かったが、ときにはその使用方法に特別な意味が込められることがあった。例えば、中国において産後の女性は、紅糖を溶いた湯や粥を摂取する風習があった。紅糖には、産後、女性の体内に溜まった「悪露」を排出する効果があると考えられていたためである。また、紅糖は「紅」という字を含むため、縁起の良いものとされていた。19世紀末から20世紀初頭には、子供が生まれた親戚や友人などに祝い物として紅糖を贈る習慣が根付いていた。

また、19世紀において紅糖には、アヘンの依存症を断つという効果があるとされていた。四川糖市場の拡大には、同時期に起きていたアヘン消費の大衆化が関係している可能性がある。

四川糖の市場は、こうした砂糖消費文化に支えられて拡大した。18世紀ごろまで、主に広東や福建から砂糖の供給を受けていた長江上・中流域では、四川という新たな砂糖供給源の出現によって砂糖が手に入りやすくなった結果、それまで以上に砂糖を消費するようになったと考えられる。砂糖生産・流通によって移住者一族が上昇を果たした背景には、砂糖を取り巻く好況が関係していたのである。

19世紀末になると、中国市場には機械で作られた外国産の砂糖が流入するようになったが、交通上の問題や、一大産糖地としての四川糖の存在が障壁となり、長江上・中流域における外国糖の流入は遅れた。また、四川糖は機械で作られた外国産の精製糖よりも甘く、根強い需要があった。そのため、四川糖は1910年代ごろまで、外国糖と競合し、中国内陸部市場を維持していた。

ところが、1910年代ごろから、四川では砂糖の生産に税がかけられるようになり、流通税もまた増加したこと、四川糖を遠くへ運ぶほど、採算が取れなくなる状況に追い込まれた。1920年代には交通上の問題が解消され、宜昌以西にも外国糖が流入するようになった。これにより、四川糖市場は大幅に縮小し、四川糖は一部を除いてほとんどが四川省内で消費されるようになった。

四川糖市場が縮小した背景には、砂糖に対する消費者の需要が変化したことも関係している。特に20世紀初頭において、中国では白くて光沢のある精製糖が「精潔」であるとして徐々に評価されるようになった。一方で、伝統製法で作られた中国産白糖は、不純物の除去が不十分であるために濁った色をしており、「不潔」なものであるとして忌避されるようになった。特に白糖を製造する過程で、砂糖の表面に泥をかぶせて分蜜を行う覆土法は、衛生的な観点から問題となった。精製糖の消費は特に都市部から増加し、それまで以上に大量の砂糖が消費されるようになっていた。

これには、20世紀初頭の中国社会における科学概念の浸透が関係している。当時、精製糖の強みは科学的製法に基づいていることにあり、人々は科学的根拠をもとに、機械で作られた精製糖を高く評価するようになった。科学は「近代」と分かちがたく結びついており、純度の高く衛生的で美しい「きれいな」砂糖が求められるようになったのは、消費者の価値観が「近代化」した結果である。本論文では、「きれいな」砂糖を大量に消費するようになる消費の趨勢を「砂糖消費の近代化」として位置づけた。

一方、四川糖業における砂糖生産の機械化は1930年代末まで遅れた。四川糖業はこうした消費者側の価値観の変化に対応出来なかった結果、衰退した。これに伴い、砂糖生産もまた、上昇手段としての有効性を失っていった。

これらのことから、四川糖業に上昇手段としての有効性を付与していたのは、中国社会における四川糖需要であったことが窺える。ある生業で上昇可能かどうかは、中国社会の需要によって左右されていた。中国社会、ひいては国際社会における需要の変化にうまく対応していくことが、社会的上昇を果たすためのカギであったのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (岡田悠希)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	大阪大学 教授	田口宏二朗
	副 査	大阪大学 教授	深尾葉子
	副 査	大阪大学 教授	堤一昭
	副 査	大阪大学 教授	松井太
	副 査	大阪大学 准教授	河上麻由子
	副 査	大阪大学 准教授	多賀良寛
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：近世・近代中国社会における移住・開発と四川糖業

学位申請者 岡田悠希

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 田口宏二朗

副査 大阪大学教授 深尾葉子

副査 大阪大学教授 堤一昭

副査 大阪大学教授 松井太

副査 大阪大学准教授 河上麻由子

副査 大阪大学准教授 多賀良寛

【論文内容の要旨】

本論文は、帝政期（18世紀）から（中華民国期）20世紀にかけての、長江上流域における客家系移民に焦点を据え、農地開発と糖業という側面より、当地の社会史・経済史を復元するとともに、より広域な流通構造に位置づけたものである。400字詰め原稿用紙で512枚、『史学雑誌』『社会経済史学』『東洋史研究』といった査読誌に掲載・投稿中の論考に加え、書き下ろしの部分も含め計4章立てとなっている。

第1章では、18世紀、清朝皇帝のもとに届いた奏摺に見られる興味深い記事を分析する。長江中流域からの移民に比して、後発組ゆえに相対的に劣悪な地理環境に定住せざるを得なかつたとされる客家系移民は、実は一定の資産を移住元と移住先に保有していたこと、かれらの移動戦略が、より有利な条件での水田稻作経営の拡大に据えられたことを描き出す。第2章では、18世紀から19世紀にかけての客家系移民が四川に定着する過程が扱われる。排水・保水に有利な農地がほぼ先発移民たちに開墾しつくされたため、かれらは「河壩」と呼ばれる幹河・支河近接地に農地・家屋と工房を構え、甘蔗栽培と在来工法による製糖業を営むようになる。この農学・工学上のすみ分けーなかばエスニック区分にもとづくーは、糖業の盛行のなかで一定の安定性を示したが、かれらのなかで地方エリートとして上昇を遂げた者は、やがて先発移民同様の地区に移動する。第3章では、19世紀における四川糖市場の拡がり、および消費のあり方につき分析される。四川糖が湖北や雲南という隣接地域のみならず、華北や長江下流域にまで販路を有した点、四川糖の消費需要の広さが、その特徴ある甘味にしばしば求められる点、そして当時の料理書等にみるかぎり、先行研究が想定する以上の砂糖消費量の水準にあったと推定される点が、述べられる。第4章では、20世紀の民国期における四川糖の衰微に光が当てられる。地方志・海關史料や日本人による調査記録にみるかぎり、1910年代を境として、（かつて中国最大規模を誇った）在来工法で生産される四川の砂糖は、台湾植民地や香港から流入する工場製精製糖に淘汰されてゆく。その背景として、1つには地方政府による野放図な流通税課徴、もう1つにはより清潔で不純物の少ない砂糖が、「科学」の名のもとに、特に都市部の消費者により選好されるようになっていた点が挙げられる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文においては、当時の移住民が、王朝の指令を搔い潜り、エージェントや個人的紐帶を媒介としつつ数十から数百人規模で千数百kmにわたり移住を繰り返す姿、かれら客家系移住民が製糖業を権力として開拓適地に定着し、地域エリートにのし上がっていく過程、これらミクロの状況の集積として、四川地域が東アジアでも有数の砂糖生産地として、広域経済での存在感を短期的ながら高めてゆく大状況が生じてくる点を活写する、本論文の実証面・理論面での価値は高い。とりわけ砂糖の経済史という中国史ではやや蓄積の薄いテーマに焦点を当て、檔案・地方志・族譜・近代以降の報告書および海關関係史料等々、幅広く材料を集め、生産・流通・消費すべての面にわたって議論を展開している部分は、学位請求者のオリジナリティを如実に示すものである。かつての地域社会論における地縁ごとの移住=>宗族へという図式や、省単位での地域間分業論に再検討を迫り、またこれまで低めに見積もられてきた中国での砂糖消費量に関する議論に一石を投じているのも、特筆に値する。エビデンスの発掘・精緻な議論・みずから実証内容の周到な位置づけとその限界を特定する点いずれも、本論文は高い水準をクリアーするものである。総じていえば、関連分野を総動員する明清社会経済史の伝統と、地域リーダー析出のミクロ構造を注視するいわゆる地域社会論を統合したうえで、この知見を、より広域な上位レイヤーへと接合し、わが国の帝政期経済史研究をあらたな高みに引き上げようとする試みであり、高い評価に値する。

むろん、まだ課題もある。たとえば、第1章の18世紀の檔案に現れた広東移民の具体例はいざれも興味深いが、ここで取り上げた事例にどれだけ代表性があるか、という点である。また、都市での砂糖消費と近代化をめぐる議論は興味深いものの、「科学」と中国の後進性というレトリックは、いわゆる五・四世代に共通の論調であり、これにどこまで重みづけをするか、というのも要検討である。むしろ、しばしば先行研究でも注目されたアヘン生産の問題により注意を向ける必要がある。海關のDecennial Reportでは、1919年以降、四川での非合法アヘンの数量が激増している。

ただし以上の問題は本論文にとって決定的な瑕疵とはいえない。したがって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいと認めるものである。